

史料報

第 26 号

昭和52年 3 月

東寺百合文書の整理について

上 島 有

(京都府立総合資料館
歴史資料課主査)

付せられたものである。

東寺百合文書は、東大寺文書・高野山文書などとともに、わが国の中世文書を代表する古文書である。これは中世の東寺（正式には教王護国寺）が、その寺院活動を行う必要から集積された文書が現在に伝えられたものである。この文書の上限は天平時代から、下限は大体江戸時代初期におよぶ約二万点三万通の文書群で、現存の中世文書のうちで最大のものである。この文書は、加賀百万石の五代目の藩主松雲公前田綱紀が整理をし、これを長く後世に伝える目的で、百（現在は九四）の桐箱を寄進して、すべての文書をそれに納めた。「百合文書」という名称は、この松雲公の偉業をたたえる意味で

この文書は、はやくから東京大学史料編纂所で影写本が作成され（一部は京都大学文学部国史研究室にもある）、広く学界で利用されてきた。しかし昭和四一年夏、この文書の一部が巷間に流失していることが明らかとなり、しかるべき公共機関で一括保管することが強く要望された。そこで京都府は翌年これを購入、京都府立総合資料館において、保管・整理を行うことになった。以下私達が行ってきた百合文書の整理の実際を、具体的に述べてみよう。

京都府立総合資料館において、この文書の整理がはじまったのは昭和四二年一〇月である。二万点にもお

目次

東寺百合文書の整理について	頁
上 島 有 (1)	
所在調査報告Ⅱ山形県大石田町高桑家	
文書ほか・安房国荒川村高梨家文書 (4)	

史料紹介Ⅱ京都「諸州国々飛脚便江鑑」について	頁
藤村潤一郎 (6)	
新収史料紹介・受贈図書	
葉報ほか (15)	

よぶ中世文書の整理を行うことは、これまでその例をみない大事業であるため、整理開始の前後に、数度にわたって学識経験者の意見を聞いて、仕事の完全を期した。ここでは目録作成の具体的方法から、文書補修のあり方など細かい点にいたるまで検討が加えられたが、とくに整理の基本方針として確認されたのは、つぎの二点であった。

まず東寺百合文書は美術品としても超一級品ではあるが、あくまでも歴史の史料として整理を行い、文書の原状の維持に細心の注意を払う必要があるということである。すなわち現在の学問水準では、ほとんど無意味と思われることであっても、将来の学問の進歩によって、重要な意味を見出すこともあるから、できるだけ完全な形でこの文書を後世に伝えるように配慮するというのである。具体的には文書の料紙の原状保持に注意するのはもちろん、従来ほとんど無視されてきた札紙・包紙等

も軽んずることなく、また切封ひとつでもその取扱いに注意するということである。

つぎに、さきの原則にも関連することであるが、東寺百合文書はすでに貴重な中世史料として、広く学界で利用されているので、その体系を混乱させることのないように配慮しなければならぬということである。すなわち今回の整理で箱間の文書の恣意的な移動を厳に慎むのは当然であるが、過去の混乱もこの際あるべき姿にもどすというのである。極端な例をひとつ挙げると、影写本では「か箱」が空箱になっているのに、京都府が購入したときには、「か箱」に影写本の「ま箱」の文書が入っており、「ま箱」は空箱であった。そして細かく検討してみると、文書が「ま箱」から「か箱」へ移された事柄もおおよその時期もはつきりしたので、改めてそれを「ま箱」に返し、「ま箱」の文書として目録を作成したが、これ程大規模なものでは

くても、一通・二通といった文書の箱間の混乱は、ままみられるところである。大部分の影写本が作成されたのは、明治三〇年代から四〇年代にかけてであるが、その後いろんな事情で、わずかではあるが、このような混乱が生じた場合がある。このような場合には、影写本の所在に従ってその文書をもとの箱にかえし、その上で目録作成を行うことにした。（この文書の箱間の移動はすべて假目録の備考欄に記載する）。

以上の基本原則をふまえて、まずこの文書の基本台帳ともなるべき第一次の目録（私達はこれを假目録と呼んでいる）の作成にかかった。まず文書を一箱ずつ編年にならべ、一通ごとの文書の文書番号、文書作成年月日、文書名、内容、差出人、受取人、料紙の紙質・形状・寸法・紙数、備考を記入した。備考欄にはその文書の補修状況や、欠失部分の状態、もと二点以上の文書を一点に接続した場合にはその記録を、また他箱に前欠部分あるいは後欠部分がある場合にはその旨を、さらに本来一点であるべき文書の本紙・札紙・包紙・追信が別の箱に納められている場合にはその模様をというように、それぞれの文書に関するあらゆるこ

とを記載して、基本台帳としての役割を充分發揮するようにした。

この目録作業と平行して、東寺百合文書の歴史的調査、すなわちこの文書のこれまでの研究・整理の経過の調査も行った。そして京都府が購入した時の状態を記録にとどめ、将来の参考に資するようにした。「東寺百合文書について」〔図録東寺百合文書〕所収）、拙稿「東寺文書の伝来と現状について」〔京都府立総合資料館「資料館紀要」創刊号所収〕、同じく拙稿「東寺百合文書の伝存に關する二・三の問題」（赤松俊秀教授退官記念「国史論集」所収）は、これに關する報告である。

これらの仕事とともに、もうひとつの重要な仕事は、文書の補修である。さきにも述べたように、文書は可能なかぎり原状を残すという原則から、できるだけ補修をしないことを大前提とした。しかし、文書の保存・利用の上でどうしても補修を必要とするものについては補修を行うが、これも原状保持を最大の課題とし、よく行われる巻物仕立はさけ、一点の文書はあくまでも一点として補修をした。したがって文書の天地・左右を切ったり、形を整えるため切封を切り取ったり、また厚い文書

の料紙の裏をそいだりといった、いやしくも文書の原状を変更するようなことはいっさい避けた。そして、この文書はかけがえのないものであるという観点から、修理業者は京都で最高の技術を有し、保管も完全に行える業者を選定した。その具体的な実施方法・仕様等については別の報告（橋本初子「東寺百合文書の補修について」―京都府立総合資料館「資料館紀要」創刊号所収）があるので、それを参照願いたい。

三

以上の作業と平行して、目録作業を進める参考資料として、編年カードをはじめ各種のカードを作成した。假目録は箱別編年で、しかも台帳式の用紙に記入しているため、目録作業を進めるには、百合文書百箱を通した約三万通の文書の編年カードが必要となる。百合文書には重要な文書については、同一の文書でも数通の案文がみられる場合がある。そしてそれらは正文だけ一通みればよいというのではなく、一通一通の案文の端裏書や注記、さらには案文自身が作成される経過などは、たんに目録作成だけではなく、広く研究資料としても意外に大きな意味をもつ場合がある。また文書は一通だけ単独

で文書としての機能を果す場合はすくなく、一つの事柄については、何通かの文書が関連連して機能を果す場合が多い。このように多角的に文書を利用しうるのは、他にみられない百合文書の特色であるが、それは編年カードが完備して、万全の偉力を發揮することになるのである。

カードは編年カードだけではなく、前欠文書・後欠文書のカード、包紙・札紙のカード等、いろんな角度からのカードを作成している。前（後）欠文書では、史料としての利用価値は非常に低い、それが完全な一点の文書になれば、その利用価値は飛躍的に高まる。本紙・札紙・包紙・追信が別々にある場合も同じである。一例を挙げてみよう。京都府立総合資料館編「図録東寺百合文書」三二一号文書は、院宣にはまちがいないが、写真でも分かるように奉者の花押だけであって、その名前は不明である。そしてこの花押は「読史備要」などにも掲載されていないが、この文書の包紙がたまたま別箱から見付かった。それにははつきり「有忠」という差出人の名前が記されており、この院宣の奉者は六条有忠であることが分かった（ちなみに最近刊行された『書の日本史』第九巻の花押総覧

に、この花押を坊門清忠とするがそれは誤である。かくしてこの文書は、「後宇多上皇院宣」という文書名を付すことができたのであるが、このように包紙や札紙から重要な事実を見出すことは稀ではない。

従来、文書の包紙や札紙・追信はまったく無視され、ほとんどの場合は、早く廃棄されてしまっている。しかし、百合文書にあつては、本紙から離されている場合が多いが、幸い廃棄されることなく一括して保存されていた。かくして前(後)欠文書や、包紙や札紙・追信を丹念に接続することによって、目録作成にも大きな成果をもたらしたのである。

前(後)欠文書や、本紙・包紙・札紙・追信が接続した場合、それが同一箱である場合には一点の文書として接続させる。しかし、箱が別の場合には、さきに述べたように、すでに学界においては影写本で史料として利用されているという実情にかんがみて、どちらかの箱に移して接続することはしない。その代りに、目録にその旨を注記して、利用者が一点の文書として利用できるよう配慮した。『東寺百合文書目録第一』の注記の大半は、このような記載にあてられている。

花押カードも、目録作成の重要な参考資料である。目録作成の作業と平行して、百合文書のすべての花押を撮影し、原寸大に引伸してカードに貼りつけて分類・整理している。

これはたんに花押だけではなく、自署もすべて花押と同じ扱いをしている。これによって人名不明の花押を確定しえたのは無数に及び、目録作成に大きな貢献をしている。またたびたび同一人物が文書に登場する場合には、その代表的ないくつかの花押を撮影するにとどめるが、その文書番号をすべてカードに記載して、花押カードが人名索引の役割を果たすようにもしている。

四

この假目録作成の作業は、昭和四二年一〇月にはじまり、同五〇年三月で一段落をみた。この間、昭和四五年五月と同四九年二月の二度にわたって「東寺百合文書展」を開催して、この文書の内容とその整理事業の実態を一般に紹介し、あわせて『図録東寺百合文書』・続図録東寺百合文書』を刊行した。

昭和五〇年四月からは、『東寺百合文書目録』の刊行に着手した。すでに假目録ができていたとはいえ、これを最終的な目録として刊行する

のは、別の意味で大事業である。約二万点三万通の東寺百合文書の箱別編年目録五冊を毎年一冊ずつ刊行することとし、その第一巻を五〇年度の仕事として刊行し(発売所吉川弘文館)、同第二巻も五一年度内に刊行することになっている。

五百点・千点程度といった文書の目録であれば、たんに文書名だけではなく、差出人・受取人・内容も記載して、利用の便をはかることができる。しかし、文書名を一行記載するだけでも、五百頁の本が五冊になるのであるから、たとえば内容にもう一行とれば、たちまち一〇冊になってしまうという計算になる。そのため或程度無味乾燥になるのは覚悟の上で、一点の文書については、文書番号、文書作成年月日、文書名、料紙の紙質・形状・寸法、それに必要に応じて注記という最低限のものにしぼらざるをえなかった。

ただ、注記はできるだけ詳しく記載することにした。さきに述べた前(後)欠文書の状態、本来一点であるべき文書の本紙・札紙・包紙・追信が別の箱に納められている場合は当然であるが、さらに欠年文書で他の関連史料によってその年紀を決定できる場合、案文の年月日の誤、奥

書・裏書・裏封等で文書の働きに重要な意味をもつ場合、牛王宝印の種類等、文書利用の上でとくに留意しなければならない点を記載した。また、東寺百合文書は、これまで影写本による利用が一般的であつたという実状を考えて、影写本に含まれていないいわゆる新史料には、特別のマークを付して利用の便をはかった。東寺百合文書は、その質においても、またその量においても、わが国最大の古文書のひとつである。したがって、このような大規模な文書の整理は、明治以来その例をみないのであるが、私達はこのいわば歴史的な大事業にたずさわりたいことを誇りに思うのである。そして、影写本や写真版ではえられない「生の文書」の迫力に魅せられて、毎日の仕事を続けていく。それだけにまた、私達の責任の重さを痛感するものである。したがって、私達の仕事は、東寺百合文書の史料的価値を高めることはあつても、万が一にもそれをそこなうことのないよう、ことにその保存において、万全を期したいと念願するものである。

史料所在調査報告

山形県北村山郡大石田町

高桑家文書 ほか

山形県北村山郡大石田町（旧村名出羽国村山郡大石田村）は、北村山郡の北部に位置し、町の中央を南から北へ最上川が蛇行しながら流れ、その流域にそって集落と耕地がひらけている。鉄道開通以前は最上川舟運の重要な河岸として栄え、荷物の積みおろしや出羽三山参詣の道者でにぎわったところである。また戦前には舟運の発達を背景に成長した商人地主が多かった。

元禄二年、松尾芭蕉がこの地で、五月雨の歌仙を巻いたことは有名であるが、明治以降では正岡子規・斎藤茂吉・金山平三・小松均など多くの文人墨客が訪れ、あるいは住みついていた。この秋には茂吉の住んでいた聴禽舎のあたりに町立の歴史民俗資料館が開館されるという。また昭和四七年より町史編さん事業が進められているが、本年度史料調査をおこなった高桑家文書、町役場所蔵文書、石塚家文書なども、町史編集委員会の調査によって新たにその所在の確認されたものである。

なお、すでに山形大学附属図書館に納められている大石田河岸史料としては、二藤節家文書・庄司家文書・土尾家文書・渡辺家文書など約三万点の史料があるが、これらは山形大学教育学部工藤定雄教授らの精力的な調査の結果によるものである。これらの史料を通して窺えることは、「村文書」としては、極めて多面的な性格を持つていることである。大石田は寛永十三年まで一つの村であったが、寛文八年以降、大石田本町、大石田四日町、大石田村、柏倉附大石田村の四カ村に分かれ明治二〇年まで続いた。しかし、この四つの村は「大石田惣町」として一体となり河岸としての機能を果たしていた。すなわち大石田は村方・船方（＝河岸）・町方とそれぞれの性格を持つていた。したがって伝存の史料も多岐にわたっているであろう。

「高桑家文書」 高桑家は「東講商人鑑」（安政二年）にもあるように、船持荷問屋を営み、茶・砂糖類の卸店を兼ねていた。幕末期には川船八艘を所持し、米・雑穀を集荷し

て酒田湊へ下す荷主商人でもあった。同家文書の大半はこうした河岸商人の経営諸帳簿であり、近世後期における船持荷問屋経営の実態を知ることができる。内容には金銭出入帳・当座帳・万覚帳・差引帳・荷払帳・荷請帳・蔵出入覚帳・書出帳・売買仕切・舟方帳などで、ほかに幕府直営の大石田川船方役所との往復文書を書留めた「諸用書控留」

「諸用留」がある。なお高桑家文書のうち経営帳簿の一部が四、五年前に山形市内の古書店に売りに出されたが幸いに山形大学の横山昭男助教が購入されたので、今回同氏の御協力をいただいて、調査目録に、この分も加えることができた。なお近世の大石田は先にふれたように四カ村に分かれていたが、高桑家は大石田村に属し、幕末期には名主を勤めている。しかし大石田村文書の基本的なもの的大部分は最後の名主を勤めた庄司家に引継がれた。

「石塚家文書」は尾花沢市大字五十沢（旧村名、出羽国村山郡五十沢村）の旧名主文書である。近世初頭、五十沢村は大石田領（幕領）であり、尾花沢よりも大石田とのつながりが深かった。同家文書のなかには寛文十年の「大石田領五十沢村戌之年名

寄帳」と「延宝二年検地帳写」とがあるが、この両史料によって、寛文延宝幕領総検地の施行以前と以後の年貢収取を比較することができるとある。

「大石田町役場文書」は大石田惣町関係史料で、昭和四六年当時、町史編さんの準備の任にあたっていた青木力蔵氏が、旧役場の倉庫から発見されたものである。この文書の中には宝暦十三年から安永七年まで十六年間の寄合記録である「月並寄合記」寛保元年から明治十九年までの「道者・町目録」などもある。また正徳元年から宝暦四年まで、大石田は参勤交替のコースとなったが、それは隣村の尾花沢本陣が雪で潰れたために変更されたのであって、その間の人馬賃銭の収支の記録、それに町の防災に関する提帳とか自身番閤係の史料なども含まれている。

最後に、今回の調査にあたり、終始ご好意を賜った大石田町長高桑喜之助氏、高桑幸助氏、石塚清氏、それに公民館での調査をご快諾下さった五十沢区長小松氏、そして調査員各位に、ここに改めて深甚の謝意を表する次第です。（調査員 山形県総務部広報課県史編さん主査梅津保一・森谷円人・山内勲・伊藤直子・柿崎幸子・関淳一 当館榎本宗次）

史料所在調査報告

安房国平郡荒川村（現、千葉県安房郡富山町荒川）

高梨家文書

本調査は、昭和五十二年二月三日、五日の三日間にわたり、千葉県史編さん室山本光正氏に委嘱し、法政大学・神奈川大学・学習院大学の大学院生六氏の協力をえて実施された。

東京より特急にのって南房をくだること約二時間、海水浴場で有名な岩井駅におりたつた一行は、富山町の御好意によつて手配された車にのり、約一二キロ山手に入った山村というよりはむしろ牧場の村といった静かな村についた。一日にバスが三回しか通っていないというこの地帯は、むかしから峯岡の牧といわれた牧場で生計を立てて暮していた人が多いようで、本場に長閑なところである。延喜式に出てくる「安房国川上郡」の川上は、荒川村とはもと平郡（平久里）村の同一村内であったので、古くは交通の要路でもあったかと思われる。

高梨家は中世末に信濃国より当地に移住したと伝えられるが、当時の経緯を記す記録類は管見の限り現存しない。当家は推測ではあるが、牧の牧士として土著したのち、近世に

入ってから名主役を勤めるようになったと思われる。現在のご当主高梨昭氏も獣医として東奔西走して活躍しておられる。高梨家は江戸時代に入つてからは喜兵衛→利右衛門→半兵衛と名をつがれ、天保期に一度菊蔵と改名されたが、それ以後は半兵衛を襲名し、幕末の一時期嗣子幼少のため他家が名主役を勤めているのは、代々名主役を世襲している。

高梨家の居住する荒川村は、平郡の中でもっとも山奥の村で、外房内房のほぼ中間に位置し、村高は「元禄郷帳」によれば、七一七石三斗九升一合で、この村高は幕末に至るまで大きな変化はなかった。

荒川村は、かの里見八犬伝で有名な里見氏のいたところで、のち中村弥右衛門の領有となり、慶長二〇年内藤左馬助政長（佐貫城主）元和八年には内藤修理亮清政（勝山）領となったが、寛永六年清政の長子正勝の死によつて天領となり、さらに寛永一五年に堀田加賀守正盛（佐倉）の所領にかわつたが、万治三年より再び天領となり明治に至つた。明治

元年一月には西尾藩、同四年七月西尾県、同一月に木更津県を経て千葉県に編入された。万治三年天領になつてからは代官の交替が激しく、正徳四年より慶応二年に至るまで約二五名の数にのぼっている。

荒川村は峯岡牧に隣接しており、牧に隣接する諸村は、御林山の地付村と同じく、野付村と最寄村とに区分され、峯岡牧にちかに接していた荒川村は当然野付村であつた。野付村は牧の堤の修理をはじめとして、種々の人足動員を義務づけられていた。峯岡牧に最も近接している山田・中村・荒川・吉井の四ヶ村の名主を「牧士」に任命し、牧の管理をさせたが、享保七年にはこの牧士制度の改革によつて、新たに一六名の牧士が増員任命されている。高梨家は当初よりこの牧士に任命され、牧士の代表である触頭役をもつとめたことがある。

以上のような事情から、高梨家に襲藏されている文書は、明暦以降明治に至る村方文書と峯岡牧に関する史料である。総点数は約一、一〇〇点余で、その主な内容は、明暦元年の田畑地詰帳をはじめとする名寄帳新田改帳などの土地史料と、貢租関係の年貢割付・皆落・勘定目録など

が比較的良好に揃っている。従来安房地方の文政改革の組合村の具体的な究明は余りなされてないが、これらの史料も数点含まれ、とくに文政一〇年一月の改革組合編成に対し、既存の組合の存続を願ひ出た史料などは、峯岡牧の野付村組合との関連かと思われる。

牧士については、牧士扶持米渡方に関して荒川村他二ヶ村の対談書や扶持米受取手形などがあり、牧士の具体的な役職を知りうることで、また牧士の触頭の史料も散見されるが、これらは他地方では余り見ることのできない特殊な文書である。なお富士講御師に関する史料など、山村における民俗の一端をうかがうる資料もみえ、安房地区における山村の形態を知る上にも、好史料が多く所藏されている。

今回の調査につき、当館からは浅井が参加したが、山本光正氏の多大のご努力と学生諸氏の協力によつて無事終了することができました。現地の川崎芳郎氏や富山町の方々には一方ならぬご高配をえ、とくに高梨家には、御多忙のところ大変ご迷惑をおかけし、ここに改めて関係下さいました皆様様に深謝の意を表したい。



京都「諸州國々飛脚便宜鑑」について

藤村潤一郎

一八八八(明治二一)年三月二〇

日夜、シャロック・ホームズは一枚の便箋を手掛りに、E.P.G.C.の透し

からボヘミア製の紙と考へ、さらに文面から「この手紙を書いた男はド

イツ人だよ。奇妙な語調があつたのに気づいただろう。 This account

of you we have from all quarters received フランス人やロシア人なら、

けつしてこうは書かない。動詞をこんな

ななに虐待して最後にもつてくるのは、ドイツ人だ」と推理した。(ドイツ

ル「ボヘミアの醜聞」阿部知二訳) さて私の手元に一枚のコピーがある。

福島市の金子一郎氏から贈られたもの、約三六×五〇センチの一枚

刷で「諸州國々飛脚便宜鑑」とある。この史料について考えたい。

まず金子氏のご許可を得たので内容を次に示すが、紙幅の都合上原形

を崩し、氏名に番号を附した。

同

同

同

同

同

同

同

京都

寺町通二条下ル処
柏屋宗七板
鳥丸通六角下ル処
三好屋徳兵衛

江戸定飛脚順番問屋

附り駿河 甲斐 伊豆 相模 武蔵

安房 上総 下総 上野 下野

信濃 陸奥 出羽 右道筋

新町二条上ル

右同断

(1)越後屋孫右衛門

(2)奈良物屋三右衛門

姉小路車屋町角

(3)湊屋庄兵衛

東洞院三条上ル

(4)近江屋喜兵衛

高倉姉小路上ル

(5)越後屋七郎右衛門

鳥丸姉小路上ル

(6)笹屋七郎兵衛

高倉御池上ル

(7)大黒屋庄次郎

間之町御池上ル

同 (8)丸屋源之助
同町 (9)井筒屋彦三郎
高倉姉小路上ル

江戸早飛脚仕立所(10)近江屋喜平次

富小路三条上ル

同飛脚屋

(11)江戸屋安右衛門

鳥丸仏光寺下ル

同

(12)近江屋新兵衛

間之町魚店上ル

同

(13)近江屋喜左衛門

丸太町鳥丸西入ル

同

(14)伊勢屋六兵衛

東洞院夷川下ル

同

(15)加賀屋作兵衛

間之町竹屋町下ル

同

(16)河内屋次兵衛

竹屋町柳馬場角

同

(17)近江屋市兵衛

東洞院夷川下ル

同

(18)近江屋又右衛門

出雲 石見 隠岐

同

播磨 美作 備前 備中 備後

同

安藝 周防 長門 紀伊 淡路

同

阿波 讃岐 伊豫 土佐 筑前

同

筑後 豊前 豊後 肥前 肥後

同

日向 大隅 薩摩 壹岐 對馬

同

右西国筋并ニ江戸大廻シ

同

大阪順番飛脚所 河内取次 牧方 守口

同

紀州御飛脚所 附り 伊勢三度 柳馬場三条下ル

同

(31)桔梗屋武右衛門

同

四條富小路角

同

(19)和泉屋治兵衛

同

三條柳馬場角

同

(20)明石屋六兵衛

同

柳馬場蛸薬師下ル

同

(21)大阪屋七郎右衛門

同

六角室町東入ル

同

(22)和泉屋徳兵衛

同

松原寺町西入ル

同

(23)大坂屋甚兵衛

同

油小路五条下ル二丁目

同

(24)松屋太右衛門

同

東洞院三条上ル

同

(25)天満屋吉兵衛

同

柳馬場蛸薬師上ル

同

(26)万屋長吉

同

四條烏丸東入

同

(27)井筒屋弥兵衛

同

柳馬場四條上ル

同

(28)近江屋権兵衛

同

出日毎月十五度 新町四條下ル

同

尾州御飛脚出所 (29)井口屋半左衛門

同

大垣岐阜加納郡上 室町錦上ル

同

尾州御藏会所 (30)岐屋屋宗右衛門

同

関犬山北方竹ヶ鼻 出二七

同

附り 伊勢三度 柳馬場三条下ル

同

(31)桔梗屋武右衛門

同

八尾 久宝寺

同

平野 古市

同

富田林右道筋

同

四條富小路角

同

(19)和泉屋治兵衛

同

三條柳馬場角

同

(20)明石屋六兵衛

同

柳馬場蛸薬師下ル

同

(21)大阪屋七郎右衛門

同

六角室町東入ル

同

(22)和泉屋徳兵衛

同

松原寺町西入ル

同

(23)大坂屋甚兵衛

同

油小路五条下ル二丁目

同

(24)松屋太右衛門

同

東洞院三条上ル

同

(25)天満屋吉兵衛

同

柳馬場蛸薬師上ル

同

(26)万屋長吉

同

四條烏丸東入

同

(27)井筒屋弥兵衛

同

柳馬場四條上ル

同

(28)近江屋権兵衛

同

出日毎月十五度 新町四條下ル

同

尾州御飛脚出所 (29)井口屋半左衛門

同

大垣岐阜加納郡上 室町錦上ル

同

尾州御藏会所 (30)岐屋屋宗右衛門

同

関犬山北方竹ヶ鼻 出二七

同

附り 伊勢三度 柳馬場三条下ル

同

(31)桔梗屋武右衛門

同

高野泉州	和州木津	新川筋	出七々	御幸町三条下ル	同断	道筋	(66) 出石屋小 兵衛
大聖寺小松本吉	出 (42) 綿 屋半 兵衛	越中富山三度宿	(54) 茶木屋伊	助	同断	道筋	魅屋丁錦上ル
奈田宮腰松任	六十	附飛彈高山取次	出三八	富小路五条上ル	同断	道筋	(67) 丹後屋嘉 七
加賀飛脚所	高野飛脚所	出日十々	姉小路車屋丁角	兵衛	同断	道筋	東洞院松原下ル
能州所ノ口輪嶋三崎七屋越中筋	三州遠州	附リ備前備中	富小路錦上ル	兵衛	同断	道筋	(68) 山本屋徳 兵衛
今庄府中鯖江丸岡	三條東洞院東入	播州姫路飛脚	(45) 金沢屋七 兵衛	兵衛	同断	道筋	鳥丸松原下ル
越州飛脚所	(33) 八文字屋理兵衛	魅屋町三条上ル	同飛脚宿	(46) 伊勢屋權 兵衛	丹後飛脚在々	宮津	三條新町西入
金津三國大野吉崎	大垣岐阜	姉小路富小路東入	附リ岸和田貝塚佐野	東洞院三条	上ル	上ル	(70) 山田屋卯 兵衛
美濃飛脚	(34) 藤 屋宗	助	堀直飛脚所	(47) 河内屋清	助	出毎日	東中筋五条上ル
出日二七	附リ下関久留米小倉熊本	東洞院二条上ル	長崎直飛脚所	(35) 井筒屋甚 兵衛	佐嘉鹿兒島并二七日切宰領付	新町二条上ル	(71) 竹原屋喜 兵衛
長崎飛脚宿	高倉姉小路上ル	37 越後屋七郎右衛門	和州郡山飛脚	間之町御池上ル	38 丸 屋源之助	右出店	四條東洞院東入
同	39 敦賀屋彦三郎	同出二五八	50 松坂屋次郎兵衛	同出二五八	51 金 屋清 兵衛	龜山白子神戸	富小路御池下ル
同木津宿	40 越前屋五郎兵衛	同出三八	52 近江屋徳 兵衛	同出三八	53 鈴 屋太右衛門	荷物受取所	柳馬場六角下ル
郡山奈良田原元八木	柳馬場錦小	同宿	宮川筋	53 鈴 屋太右衛門	同宿	宮川筋	柳馬場六角下ル
今井舟橋八尾三輪初瀬	路下ル	多武峯右道筋	(41) 加賀屋茂	助	柳馬場六角下ル	同宿	宮川筋
柳馬場六角下ル							

同并ニ長濱便 80長濱屋清右衛門

北国筋舟便

四糸高倉東入

敦賀飛脚所 81敦賀屋彦三郎

并ニ北国筋 出一六

二日十四日廿六日 柳馬場四糸

同出廿日晦日并ニ膳所 下ル

82近江屋吉兵衛

四日七日十日十二日廿一日

廿四日廿八日并西江州筋

同出北国筋小荷物 御幸町三条上ル

83敦賀屋庄 助

附リ坂本木濱 84近江屋七三郎

同宿作州津山 出四九

附リ

85近江屋長兵衛

同宿 西江州筋 在々

附リ 86鳴 屋太兵衛

同宿 西江州筋 幸便

附リ 西江州筋 富小路錦上ル

同宿出八日十五日 87敦賀屋彦兵衛

同宿出八日十五日 87敦賀屋彦兵衛

廿五日廿八日

富小路御池下ル

江州彦根飛脚 88近江屋徳兵衛

并ニ八日市在々 出四十

御池高倉西入

同長濱飛脚宿 89播磨屋伊兵衛

柳馬場蛸業師下ル

同水口土山八幡 90丹波屋次郎兵衛

江頭仁保出二七三八

81多賀野屋利助

同石部水口

土山甲香谷

同八幡并ニ在々 92加茂屋與三右衛門

82近江屋九兵衛

同赤野井此筋

并ニ敦賀道筋出四九

出三六九

蛸業師柳馬場西入

同日野飛脚

84藤 屋嘉兵衛

柏原

富小路錦下ル

同宿木本在々

95清水屋久兵衛

御幸町錦上ル

96近江屋久次郎

江州宿八幡

出半ノ日

勢田石山

富小路錦下ル

同宿田上出五十

97大和屋宗 七

同宿大津石山勢田

98大森屋久次郎

膳所彦根出二六

附リ淀八幡宇治

同宿中郡市川筋

89近江屋久兵衛

膳所伏見出五十

99近江屋久兵衛

草津

89近江屋久兵衛

同辻村飛脚宿

100小松屋與兵衛

同在々

89播磨屋伊兵衛

同在々

100美濃屋左兵衛

新町松原上ル

同柏原黒井

102丹波屋源兵衛

同伊庭 出九、

103津国屋長兵衛

八日市

柳馬場六角下ル

同中野 出一七

100綿 屋半兵衛

不明通上珠屋町上ル

同高嶋郡淺井郡

出二七五十六日廿二日

南山城淀伏見

八幡橋本宇治

107近江屋清兵衛

大津膳所勢田

三条寺町角

伏見淀八幡宇治

108近江屋伊兵衛

大津伏見淀

109塩 屋左兵衛

奈良木津宇治

小川上長者町西入

伏見八幡橋本

120千切屋伊兵衛

伏見茨木

鳥丸五条角

富田此道筋

121富田屋吉兵衛

富田茨木高槻

二条富小路角

大津宇治山門

122米 屋万兵衛

因州飛脚所

123明石屋六兵衛

同国取鳥

富小路錦下ル

伯州米子倉吉

124備前屋多助

幸便月四度

高田荒井三条柏崎新瀉

御池柳馬場

越後長岡飛脚

東入

信州松本松代善光寺町

125藤屋茂兵衛

安居院今宮御旅丁

若州高濱宿

126沢 屋金右衛門

奈多ノ吉村

同町

同宿道筋 〇若狭屋平 七
同関屋 同町
奥丹波黒田村在々 〇若狭屋忠 助

二

板行年代が記されていないので考える。(1) (9)の江戸定飛脚順番問屋九人に最も近いのは天保七年冬松尾花堂序同八年正月刊「増補登船独案内」の江戸飛脚九人である。住所氏名が同一か、住所に一字付加などの場合は省略し、これとの相違点のみを記すると、(1)新町戎川下ル、(3)姉小路東ノとういん西へ入ル、(4)近江屋孝三郎、(5)高倉御池上ル、(6)笹屋七兵衛、(8)丸屋孫市、問之町御池、(9)問之町御池であり、(7)は全く同じである。

つぎにこれに先だつ文化七年霜月優々館主人序同八年正月刊「新增京羽二重大全」(題簽「文化増補京羽二重大全」)の江戸飛脚順番仲間九人とは、(1)越後屋孫兵衛、(2)なし、(5)越後屋七郎兵衛、(8)丸屋六兵衛、高倉姉小路上ル、(9)井筒屋八郎兵衛、錦小路高倉西へ入ルであり、(3)(4)(6)(7)は同様である。

また文久三年夏換書堂主人序同年刊「文久改正京羽津根」の江戸順番飛脚仲間八人とは、(1)新町夷川下、

(4)近江屋孝三郎で、(2)(3)(5)(6)(8)(9)はなく、(7)は同一である。
以上の三者との関係では天保七年以前と推測される。

さらに(19) (28)の大坂順番飛脚所一〇人と「増補登船独案内」の大坂飛脚京都名所付一〇人とは、(21)柳ば、錦小路上ル、(23)松原通高町西へ入、(25)天満屋六兵衛、(26)万屋長吉、(27)四条通東洞院西へ入であり、(19) (20) (22) (24) (28)は同じ、矢張り最も近い。

弘化三年二月寿榮堂資翁春山序同仲春刊「大阪商工銘家集」(題簽「諸匠諸商買物独案内」)との関係は省略するが矢張り天保七年以前と考える事を裏付けるものである。

さて天保三年八月刊「商人買物独案内」(題簽「増補買物独案内」)には八人あり、(21)柳馬場錦小路、(22)いづみや弥右衛門、四條誓願寺、(24)油小路魚棚上ル、(25)東洞院二条上ル、(26)万屋長吉で、(27) (28)はなく、(19) (20) (23)は同じである。なお文政七年仲秋芳山堂主人序「商人買物独案内」の飛脚の部分はこれと同じである。

次に清水九文堂序、天保二年秋刊「京都買物独案内」(題簽「商人買物独案内」)の大坂順番飛脚仲間一〇人とは、(21)柳馬場錦小路上ル、(25)天満屋六兵衛、(26)柳馬場蛸薬師下

ル丁、(27)四条通東洞院西へ入であり、(19) (20) (22) (23) (24) (28)は同じである。従ってこの一枚刷は天保三十七年の間に当ると推定出来る。

なおこの他にも「京都買物独案内」には、(11)江戸定飛脚問屋、富小路二条下ル、(31)紀州定飛脚問屋、(49)南北勢州定飛脚会所、(50)治郎兵衛、(68)但馬入湯駕籠、飛脚出所、(35)は同じで、以上は天保二年に存在している。他に長崎直飛脚所長崎屋亀三郎があるが(36)との関係は不明であり、桑名屋吉兵衛、桑名御用飛脚会所は当該番号がない。これらの点は推定年代が天保三年に近いかい年である事を予想させるが、ここでは天保初年とし、詳細は今後の研究にまかしたい。なお板元については知る事ができなかった。

三

以上甚だ不十分であるが「諸州国々飛脚便宜鑑」についてみた。全部で一二八の飛脚屋があり、これだけの名簿は、京都について他に気付いていない。田舎者の私は京について知らないが、その地域には矢張り京都の都市的性格が反映している。

ところで飛脚屋には町奉行の目がひかっていたようで、安政五年八月一五日付老中宛「風聞書」(東京大学史料編纂所編「大日本維新史料」

類纂之部 井伊家史料八 三一一七頁)に、水戸屋敷鶴飼幸吉が内密に江戸順番飛脚(7)大黒屋庄次郎に依頼した包状箱は筒抜になり、水戸藩降勅が報告されている。以前から検閲が行なわれていたようで、安政の大獄での鶴飼の運命はこれから結果だろう。

さて一八八九(明治二)年に、ホームズは古文書を鑑定している。

即ち「一、二インチ、ポケットからはみ出していたから、お話のあいだに鑑定することができたのです。十年かそこいらのちがいで、文書の年代を推定できないようでは、玄人として情けないわけです。お読みになったかもしれないが、ぼくは、この問題について、ちよつとした論文を書いたことがあります。一七三〇年とにらんだのですが」と言ったら、一七四二年であった。それはS字の書き方などによっている(「バスカヴィル家の犬」)。私は原史料をまだ拝見していないし、参考史料迄持出してこの有様で慙愧にたえない。

最後にワトスンではないが「公刊物でくわしくとりあつかわれることが、今回までなかったのである」(「入院患者」)から、鑛刻を許可された金子氏の好意に深謝したい。

昭和五一年度 新収史料紹介

⑤はマイクロフィルムによる収集を示す

④越前国 東鯖江村窪田家文書

本文書は、間部下総守詮言が、享保五年鯖江に入部した当時より、鯖江城下陣屋付組の代表庄屋として明治まで世襲でつとめた東鯖江村庄屋窪田彦左衛門家の旧蔵史料である。

窪田家文書は、宝暦五年の「御陣屋附村々御賄帳」をはじめとする支配関係のもの、また幕末の御才寛金についての諸帳、土地・年貢・八ヶ用水・王山出入など庄屋文書として比較的よく揃っている。

今回の収録史料は、鯖江藩成立と同時に、陣屋附の代表庄屋(町庄屋)として明治四年まで、代々引きつがれて書かれた日記・御用留九〇冊である。途中文政一二年より天保一一年まで約一二年間を欠くが、これは、先庄屋の急死によって嗣子幼少のため、分家が一時交代して庄屋役を勤めたためである。とくにこの日記は、間部氏の日記と同時代の村庄屋の日記であり、またさきに同藩の大庄屋千秋家の日記も当館でマイクロ化した関係上この三者の日記を関聯づけ

て研究するためには好箇の史料である。(史料所蔵者〓鯖江市日の出町窪田秀男氏、総点数九七点、収録フィルム一一リール 六一・一二コマ)

⑤河内国 山沢家文書

山沢家は河内国若江郡下小坂村にあり、旗本石丸家の郷方役人として代官・大庄屋を享保期以降ほぼ一貫して世襲的に勤めている。

旗本石丸家知行所は相給であるが、下小坂村に寛文三年以来ある。知行所は宝永元年以後上方では河内国の若江郡下小坂村と同中小坂村及び丹北郡本本村が各相給、志紀郡北条村が全村で四カ村あり、他に武蔵・上総国に七カ村があった。

山沢家は河内国分知行所四カ村の貢租徴収を一手に処理し、同家財政の総轄者的な位置にあった。

マイクロ収集を実施したのは同家文書の中で、主として宝暦期以降幕末迄の「江戸御用留」「江戸状控」と、化政期の「江戸御状至来分留」で、その内容は江戸の領主役人との往復書類の控である。各種の申上届

書、為替、用水樋普請願、御機嫌伺、貢租勘定請証文、御用金、頼母子、役仰付などを含む。(史料所蔵者〓東大阪府下小坂七七二 山沢正雄氏、東大阪府役所市史編纂室寄託、総点数一〇〇点、収録フィルム一〇リール、六〇六九コマ)

⑥京都柏原家文書

前年度未収録に終った柏原家の江戸本町四丁目店(柏屋孫左衛門、木綿・呉服・小間物問屋)の天保以降明治一七年至る勘定目録(京都本店宛の決算報告)、および同じく柏屋の江戸紙店(新両替町四丁目、松坂屋半右衛門名儀)の天明元年一文久三年の勘定目録を収録(史料所蔵者〓京都市東山区洛東遺芳館。総点数一三〇点、収録フィルム一六リール、八四四一コマ)

⑦京都那波家文書

一七世紀の中ごろ「京一番の有徳者」と評判され、大名貸と騒ぎの故に没落したと伝えられる京町家の名門那波家は、播州那波浦の出身とされるが、近世初頭から京都に出て、大名・旗本を主対象とする金融業を営んだ。現存する史料は、万治三年—寛文一二年「殿達借利足不相済寛」

をはじめ、寛文—宝永期の米前賣証文の体裁をとる、いわゆる大名貸証文が主要部分を占めるが、正徳以降の江戸駿河町の両替店(綿屋作兵衛名儀)における南部盛岡藩の蔵元業務、旗本三枝氏の勝手支配、芸州広島藩御用達関係など、「町人考見録」の記述を裏付ける興味深い史料が多く散見される。すなわち同書に京一番の大両替屋で大名貸の問屋と形容された両替屋善五郎の枝手形が延宝

期に集中的にみられるなどもその一例であり、中期以降の大阪の両替商による大名貸に先行した京都町人の武家金融の実態がよく窺われる。因みに該史料の現所蔵者柏原家(前出)は、江戸期に那波家と縁戚関係にあり、上記史料のほか、那波家の豪華な調度品などが数多く伝蔵されている。(所蔵者〓京都市洛東遺芳館、総点数二二二点、収録フィルム二リール、一一七四コマ)

⑧白木屋大村家文書

近江国長浜を本貫とする京都町人白木屋大村家の江戸進出は寛文二年と伝えられ、当初は日本橋通三丁目において小間物類を商い、のち通老丁目に移り、呉服・木綿類に主力をおく江戸屈指の大問屋〓「江戸店持

京商人」として存在した。惜しむらくは商業活動の実態を示す営業帳簿類に乏しいが、店舗拡充の経緯を示す宝永以降の沽券状、宝永五年「衣類定法」、元文五年・寛保三年「規矩」をはじめとする江戸店における家法・店掟等、三世紀にわたる白木屋の経営を内部から支えた店制史料が整備されているのが特色である。加えて、白木屋が所属した問屋仲間「通町組」が江戸十組の中で主要な地位を占めたため、十組問屋仲間関係史料も伝存する。特に正徳三年の表記をもつ三拾軒組（通町組・内店組）の「万記録」は十組関係の史料としては最も早い時期に属する。ほかに通町組の行事記録（安永九一文化三年）や、文化六年に設立された三橋会所の動静を伝える「冥加金取集帳」や諸勘定目録、文政二年に作帳された十組傘下の諸仲間問屋株帳約四〇冊など、徳川幕府の経済政策を反映した江戸商業史料として稀少価値をもっている。（史料所蔵者＝東京大学経済学部、総点数一六五点、収録フィルム一六リール、九七一二コマ）

⑥ 信濃国 松代 真田家文書（長野市所蔵）

長野市松代町の旧真田邸に保管さ

れている膨大な松代藩政史料が、当館に所蔵されている同史料の欠を補つて余りある良質のものであることは、すでに本館報二三号で報じた。従来から学界に知られている当館所蔵分の松代藩政史料も取りあえず冊子の型のものについてであるが、全面的な再整理と再検討の上で、近々に一点も余さない目録が刊行される予定であり、両松代藩政史料は、全国の幕藩領主側の史料に不可欠の位置を占めるものと思われる。

前記史料のマイクロ収集は、昭和五〇年度の収集（本館報二四号参照）に継続するものである。主なものは、以下の通りである。

- (1) 旧松代藩債取調ならびに消却についての明治初年の帳簿六点。
- (2) 約七十冊残されている『定小屋日記』（足輕割番所日記）から、宝暦・文久・慶応のもの四点を抜粋。
- (3) 旧藩主真田幸教が編纂した『政堂枢機年表書記』（三二冊）。同史料は、安政期の藩政改革・藩内諸事についての原史料に豊かである。
- (4) 『諸士明細書』（六冊）。『松代藩中名籍誌』（五冊）。いずれも家臣団にかんするもの。
- (5) 文政一安政にかけて、御留守居方で作製された『別条見出』（五冊）。

藩内諸事についての編年索引。

この他、幕末の足輕奉行、天保期の産物方、明治初年の勝手方関係の史料を、若干について収録した。

今回の調査に当たっても、長野市旧

受贈図書

昭和五十一年度（二）

図録 秋田市の文化財（秋田市教育委員会）

小阿地（同右）

兵庫県文化財調査報告書（兵庫県教育委員会）

横浜市史 第五巻 中・下

日本経済史文献解題 昭和50年版（日本経済史研究所）

町田の近世建築（町田市史編さん委員会）

西尾市史 三 近世下

奥田家文書 第十四・十五巻（大阪府立

図書館）

郷土資料叢書 第九輯（新庄図書館）

上山市史編集資料 No.17

BEITRAGE ZUR JAPANOLOGIE

13 ウィーン大学日本文化研究所

丹波夜久野の文化財（京都府立丹後郷土

資料館）

中山傳信録 上（沖縄県立図書館）

真田邸職員各位の全面的なご協力と、

長野県史編纂委員諸氏のご援助を頂いた。（史料現蔵者＝長野市。総点数一六三三点。収録フィルム、一二リール＝二三、三五七コマ）

贈從四位土浦藩士 大久保要（青木光行）

横浜市金沢谷開発地区文化財研究調査報告書 歴史・民俗編（横浜市文化財研究調査会）

伊豆菰山 南條區誌

大月市史 史料編

加賀藩初期十村役 金子文書（礪波市教育委員会）

（島根県）津和野町史 第一・二巻

窪地古墳・鳥ヶ根古墳（岡崎市教育委員会）

会）

坂戸遺跡（同右）

村落・報徳・地主制（明治大学社会科学研究所）

図説 阿波藍（三木文庫）

縄文式土器のうつりかわり（青森県立郷土館）

土館）

黒船渡来と箱館開港展（市立函館博物館五稜郭分館）

- 江戸時代図誌 20 山陽道〔筑摩書房〕
- 野田市文化財抄報 1〔野田市委員教育会〕
- 本庄市史 資料編
- (徳島県) 松茂町誌 上・中巻
- 豊田市史 一巻
- (静岡県) 新居町史 資料編三・五
- 和歌山県史 近世史料四
- 北上市史 第三巻 近世(1)
- 富田林市史研究紀要 第五号
- 野田市文化財報告 第三冊〔野田市教育委員会〕
- 吹田市史 第四・七巻
- 神奈川県史 資料編 8
- 鳴門市史 上巻
- 青森県埋蔵文化財調査報告書 第28集
- 〔青森県教育委員会〕
- 青梅市史史料集 第21号〔青梅市文化財保護委員会〕
- 北九州市文化財調査報告書 第21集〔北九州市教育委員会〕
- 九州市教育委員会 特別展目録 15
- 北海道開拓記念館 特別展目録 15
- Korean Culture Series 5〔国際文化財団〕
- 佐賀県史料集成 古文書編 第十七巻
- 〔佐賀県立図書館〕
- 近江史料シリーズ (2)〔滋賀県地方史研究家連絡会〕
- 埼玉県議会史 第九巻
- 日本外交文書 大正十一年 第二冊〔外務省〕
- 春記 長暦四年正月〔宮内庁書陵部〕
- 図書寮叢刊 九条家文書 六 諸寺院関係文書・後葉和歌集〔同右〕
- 日本塩業大系 史料編 近世(二) 近・現代(二)・(三) 特論・地理〔日本専売公社〕
- 所沢市文化財調査報告書 第一集〔所沢市市教育委員会〕
- 長野県 上水内郡誌 歴史編〔上水内郡誌編集会〕
- 大東市史
- 銀行実務 中級版 VOL. 6 No. 11〔銀行研修社〕
- 北陸の古陶〔小松市立博物館〕
- 東浦賀千鰯問屋史料 橋本家〔湯浅屋〕
- 文書〔横須賀市図書館〕
- 東浦賀千鰯問屋橋本家〔湯浅屋〕 文書〔統篇〕相州三浦郡金谷村〔福本家〕
- 文書〔同右〕
- 和算の世界 算額 展示目録〔東北歴史資料館〕
- 工芸〔世界文化社〕
- 日本広告発達史 上〔電通〕
- 柳田國男生誕百年記念 国際シンポジウム・民俗調査報告書〔柳田國男生誕百年記念会〕
- 柳田國男生誕百年記念 民俗調査報告書〔同右〕
- 山形市史 別巻2 生活・文化編
- (北海道) 丸瀬布町史 上・下巻
- 関西大学東北学術研究所 訳注シリーズ
- 1 シナ・インド物語
- 徳島市史 第二巻 行政編・財政編
- 近世村落の成立と封建小農〔立正大学古文書研究会〕
- 琉球教育総目次 (第一号・第116号・明治28年・明治39年)〔那覇市史編集室〕
- 資料報告書 第三集〔幡多郡大方町資料調査報告書〕〔高知県立郷土文化会館〕
- 上尾市史資料 第五・六集〔上尾市図書館〕
- 東大阪市史資料 第六集(一)
- 開拓記念館調査報告 第12号
- 上山市史編集資料 16
- 金沢文庫図録 絵画篇
- 近世風俗画〔サントリー美術館〕
- 西遊日記・肥後見聞録〔桃裕行〕
- 文化財調査報告 第15・16集〔北上市教育委員会〕
- 山形市史資料 第44・45号
- 天童市史編集資料 第4・5号
- 須賀川市史 六
- 群馬県立博物館研究報告 第11集
- 新修 福井市史 II・附録市街地図
- (福井県) 足羽町史
- 昭和五十年伊予水軍関係資料調査報告
- 〔愛媛県教育委員会〕
- 江戸時代における神社および寺院の法人格(一)・(二)〔石井良助〕
- 別冊太陽 No. 17 豪商百人〔平凡社〕
- 秋田県興業史 映画街・演劇街〔みしま書房〕
- 正保城絵図〔国立公文書館〕
- 大日本近世史料 編纂地誌備用典籍解題四・細川家史料 五・幕府書物方日記十一・諸問屋再興調 十四〔東京大学史料編纂所〕
- 大日本古記録 建内記 七・小右記 八
- 〔同右〕
- 大日本史料 第八編之三・第六編之三十七〔同右〕
- 保古飛呂比 八〔同右〕
- 日本関係海外史料 訳文編之一(上)・(下)〔同右〕
- 東北大学附属図書館 一九七三
- 大正大学五十年史
- さいたまの肖像〔埼玉県立博物館〕
- 猿毛城〔花ヶ前盛明〕
- 吹田志稿〔亘節〕
- 仙台市砂押土地区画整理事業関係文化財調査報告書〔仙台市教育委員会〕
- 沼津資料集成 四〔沼津市立駿河図書館〕
- 長野県教育史 第十一巻〔長野県教育史刊行会〕
- 豊田市史 五 民俗
- 伊達家文書目録〔北海道立図書館〕
- 北海道刊行政資料目録 第10号〔北海道総務部行政資料課〕
- 北海道所蔵簿書件名目録 第2部〔同右〕
- 北海道開拓記念館一括資料目録 第9集
- 北海道立図書館蔵書目録 第8分冊

市立旭川郷土博物館所蔵品目録 V
年4月・昭和50年3月)〔群馬県立

件名目録 IV〔北海道立教育研究所〕

学術文献収報 第171・180号〔北海道教育

大学附属図書館〕

解題書目 第六集 五家文書目録〔青森

県立図書館〕

弘前図書館蔵書目録 和装本の部その2

東北大学所蔵和漢書古典分類目録 和書

上〔東北大学附属図書館〕

秋田県歴史資料目録 第十二集〔秋田県

立秋田図書館〕

山形県関係新聞記事索引 昭和50年版

〔山形県立図書館〕

山形県立図書館増加図書目録 2

市史資料目録 第1号 鈴木八右エ門家

史料目録〔鈴木正一郎〕

歴史資料館収蔵資料目録 第5集〔福島

県文化センター〕

古河市史資料 第3集 古河市史料所在

目録 (2)

古河市郷土資料館 所蔵資料目録 第一

三集〔古河市教育委員会〕

史料目録 3 常陸笠間牧野家 牧野家

中武藤家文書目録〔茨城県歴史館〕

茨城県歴史館 和書目録 一

栃木県郷土資料総合目録 昭和51年2月

29日現在〔栃木県立図書館〕

栃木県史料所在目録 第5集〔栃木県教

育委員会〕

群馬県郷土資料総合目録 (追録昭和49

郷土資料室目録〔目黒区守屋教育会館〕

蔵書目録 一九七四年四月・一九七五年

三月〔同右〕

近世史料所在調査報告 第12集 平川家・

中島家・小林家文書目録〔埼玉県立文

書館〕

埼玉県行政文書件名目録 社寺編〔同右〕

新収品目録 昭和49・50年度〔埼玉県立

さきたま資料館〕

浦和市立郷土博物館研究調査報告書 第

3集 別冊 木内家文書目録

市史調査報告書 第一集 戸田市諸家所

蔵文書目録 (1)

大江文庫目録 江戸時代篇〔東京家政学

院大学・同短期大学〕

増加図書目録 (一九七一一一九七三年

度) 日本文・中国文〔東京大学東洋

文化研究所図書室〕

東洋文庫刊行物目録

早稲田大学図書館文庫目録 第六輯 原

田織雄文庫目録〔早稲田大学図書館〕

早稲田大学図書館和漢図書分類目録 特

刊之一 大隈文書目録 特刊之一 追冊

大隈文書目録補遺〔同右〕

東京大学史料編纂所図書目録 第二部

和漢書写本編 9

教育史料目録 1 文部省日誌総目録

〔国立教育研究所〕

一九七六 予約雑誌目録〔東海大学附属

図書館〕

郷土資料室目録〔目黒区守屋教育会館〕

東京地域資料目録 第2分冊〔東京都品

川区立図書館〕

特殊文献目録シリーズ 3 一橋大学所

蔵明治以降本邦経済統計調査マニユア

ル目録〔第一輯〕〔一橋大学経済研究

所日本経済統計文献センター〕

特殊文献目録シリーズ No.18 一橋大学

経済研究所雑誌目録 欧・露文篇〔一橋

大学経済研究所〕

憲政資料室所蔵目録 第一 憲政史編纂

会収集文書目録〔国立国会図書館〕

憲政資料室所蔵資料目録 第二 伊東巳

代治関係文書目録〔同右〕

憲政資料目録 第三 桂太郎関係文書目

録 第四 陸奥宗光関係文書目録〔同右〕

官公庁出版物目録 昭和48年版〔同右〕

水産庁水産資料館所蔵古文書目録 (北

海道・岩手編)

郷土資料目録〔区立台東図書館〕

明治大学刑事事博物館目録 第45・46号

植村記念 佐波文庫目録〔東京女子大学

附属比較文化研究所〕

野口文書分類目録〔同右〕

木村文書分類目録〔同右〕

比較文化研究所蔵書目録 IV〔同右〕

江戸川区漁具展目録〔江戸川区郷土資料

室〕

立教大学所蔵文書目録 3 立教大学所

蔵愛知県関係文書目録〔立教大学日本

史研究室〕

国立教育研究所附属教育図書館 蔵書目

録 和書の部 社会科学 IV

東京都文化財総合目録 (追加・昭和49

年10月以降指定分)〔東京都教育委員

会〕

東京都文化財総合目録〔東京都教育庁社

会教育部文化課〕

東洋大学図書館蔵書目録 第4・5巻

洋書編

東京都公文書館所蔵 蔵書目録 3

東京都公文書館所蔵 庁内刊行資料目録

11

東京都公文書館所蔵 御府内沿革図書目

録 4

東京都立中央図書館蔵書目録 一九六六

一・一九七〇

常陽の村落史料目録 No.11 常陸国筑波

郡山口村 諸家文書・No.13 常陸国新

治郡坂田村 諸家文書〔立正大学古文

書研究会〕

中央大学雑誌目録 昭和47年12月末現在

〔中央大学図書館〕

法政大学 逐次刊行物所蔵目録 昭和50

年3月末日現在

(同右) 昭和50年3月末日現在 政

府刊行物篇〔法政大学図書館〕

東久留米市史調査資料 地方文書目録

神奈川県史料所在目録 第42・43集

藤沢市史資料所在目録稿 第10集 (藤沢市文書館)

御殿場市史資料所在目録 第10集 近代史料編(四)

茅ヶ崎市史資料所在目録 (1)

神奈川県関係新聞記事索引 第14集 (神奈川県立文化資料館)

神奈川県立金沢文庫蔵書目録 主題別参考文献目録 第三

(神奈川県) 山北町所在史料目録 第一

神奈川大学図書館蔵書目録 和書 昭和49・50年 洋書 昭和49・50年

神奈川大学図書館雑誌目録 昭和46年度版追録

相模 堀江氏 古文書目録 I (小松郁夫)

東海大学附属図書館所蔵 雑誌目録 昭和51年12月現在 (東海大学附属図書館)

学習院大学史料館所蔵史料目録 第一号

信州佐久郡五郎兵衛新田村柳沢家文書 (一) 冊子部

新井市史料目録 第四集

長岡博男文庫蔵書目録 (石川県立郷土資料館)

石川県内古文書所在目録 (石川県立図書館)

能登羽咋郡二所宮村 政氏家文書目録 (同右)

金沢大学図書目録 第13巻 昭和49年度 金沢大学附属図書館目録叢刊 第1集 北条文庫目録

鯖江市史料所在目録 第1集

鹿児島県史料 忠義公史料 第四巻 (鹿児島県維新史料編さん所)

川西市史 第四巻

横浜市文化財調査報告 八輯之七 関口日誌 第七巻 (横浜市文化財研究調査会)

横浜市文化財調査報告 九輯 佛像彫刻資料集 (同右)

村山市史編集資料 第四号

青森県立郷土館調査報告 第二集

浦和市文化財調査報告書 第二十一集 (浦和市教育委員会)

磐田市誌シリーズ 第三冊

甲州文庫史料 第五巻 交通運輸編

鎌倉国宝館図録 20 鎌倉の墨蹟

津山市史 第二巻 中世

長野県史 近世史料編 第四巻 (一) 南信地方

いわき市史 第八巻 原始・古代・中世資料

滋賀県議会史 第四巻

滋賀県史 昭和編 第三巻

上山市史編集資料 第十八輯 (静岡県) 舞阪町史 史料編二(一五) (以下次号)

第二十二回近世史料取扱講習会開催される

九・十月、岡山・東京二会場

当館主催の表記講習会は、左記要項により二会場各四〇余名の受講者の参加を得て開催され、所期の成果を挙げて終了した。

(開催要項)

(一)趣旨

公共機関などにおいて、近世史料を取り扱う事例の増大に伴ない、これに関する知識技能の向上が要請されている現状にかんがみ、当該関係者に近世史料の読解・調査・集収・整理・分類・保存管理などに関する基礎的な知識技能を取得させ、近世史料の保存、利用の効果を高める。

(二)期間および会場

A 昭和五十一年九月二七日(月) 十月一日(金) 岡山県総合文化センター

B 昭和五十一年十月二五日(月) 十月二九日(金) 国立教育会館

(三)受講者

図書館・文書館・博物館・研究所・史誌編さん室等の機関に勤務し、近世史料の整理および調査研究等に従事している者で、その経験年数の比較的浅い者。

(四)講習題目と講師(敬称略)

A 岡山会場

(1) 古代中世史料概論…専修大学法学部教授 石井良助

(2) 近世史料概論(Ⅰ)…岡山大学名誉教授 藤井駿

(3) 近世史料概論(Ⅱ)…神戸大学文学部教授 高尾一彦

(4) 近代史料概論(Ⅰ)…広島大学文学部助教授 有元正雄

(5) 近代史料概論(Ⅱ)…山口県文書館専門研究員 広田暢久

(6) 史料の保存科学…高松塚保存対策調査会委員 岩崎友吉

(7) 近世の民俗資料…東京教育大学文学部教授 桜井徳太郎

(8) 史料読解(幕藩・村方・町)

(9) 史料の整理・管理

(10) 史料の分類

(8) (10) 当館教官担当

B 東京会場

(1) 古代中世史料概論…東洋大学文

学部教授寶月圭吾

(2) 近世史料概論(Ⅰ)・・・京都大学

文学部助教授 朝尾直弘

(3) 近世史料概論(Ⅱ)・・・立正大学

文学部教授 北島正元

(4) 近代史料概論(Ⅰ)・・・京都大学

経済学部助教授 中村哲

(5) 近代史料概論(Ⅱ)・・・茨城県歴史館史料課長 佐久間好雄

(6) 史料の補修・・・官内庁書陵部専門官 遠藤諦之輔

(7) 史料取扱の科学・・・東京国立文化財研究所修復技術部長 西川杏太郎

(8) 近世の民俗資料・・・東京教育大学文学部教授 桜井徳太郎

(9) 史料読解(幕藩・村方・町)

(10) 史料の整理・管理

(11) 史料の分類

(9)・(11)・・・当館教官担当

なお、両会場では、いずれも座談会と施設見学(岡山大学附属図書館、国立史料館)等を実施。

集報

○昭和五十一年度事業(その二)

一、史料の収集

今年度マイクロフィルムによる新収史料はつぎの通りである。

「越前国丹生郡東鯖江村窪田家文書」

(庄屋)・河内国若江郡下小坂村山沢家文書(庄屋)・京都「柏原家文書」(商家)・京都「那波家文書」(商家)・東京「白木屋大村家文書」(商家)・信濃国松代眞田家文書(大名)。内容などの概要については、本号一〇一頁に収載。

二、史料の所在調査

五一年八月末の山形県における第一次調査(既報)に基づいて第二次調査は、千葉県安房郡富山町荒川高梨家文書を対象として、二月三・五日千葉県史編纂室山本光正氏他のご協力を得、当館からも浅井潤子が参加して調査を実施した。調査の概要については別掲四・五頁を参照されたい。

三、第二十二回近世史料取扱講習会実施

本年度の標記講習会は、九月二七日から岡山市の岡山県総合文化センター、一〇月二五日から国立教育会館において各五日間開催された。実施にあたり会場提供をはじめ運営万般にわたってご協力、ご援助をいただいた岡山県総合文化センター、岡山大学、国立教育会館その他関係機関各位に対し深謝いたします。

四、定期刊行物

1 「史料館所蔵史料目録」第二十七集

に「下総国相馬郡藤代村飯田家文書」(その二)を収録。

2 「史料館研究紀要」第九号

収載内容は次のとおり

近世史料の分類(遺稿) 鎌田 永吉

金澤藩の通日用について 藤村潤一郎

浅草米蔵について

——「浅草米蔵旧例」の紹介——

大野 瑞男

鯖江領における村落行政の一斑

——大庄屋勤役形態をめぐって——

浅井 潤子

明治十年代における

米沢の貸座敷営業史料 原島陽一

近世中期・幕末維新期における農民層の政治・社会・経済認識の展開に

関する一考察(一)——羽州村山郡各地の場合——

大藤 修

3 「史料館報」第二十五号(五一年一〇月二〇日)、同二十六号(本号)

五、研究会

第五回(51・9・16)

近世史料の分類 鶴岡実枝子

第六回(51・10・19)

受託史料の目録化について 大野 瑞男

第七回(51・11・25)

家文書の基本類型 藤村潤一郎

第八回(51・12・16)

史料の翻刻について

○評議員会

五一年十一月一七日、国文学研究資料館評議員会議の史料部会が国立教育会館において開催され、昭和五十一年度史料館業務報告、施設の整備等その他についての議事が評議された。

○科研費による史料調査

本年度、文部省科学研究費(一般研究B)交付による「近世史料の体系化に関する基礎的研究」(代表者鈴木寿)のため、左記の史料調査を行なった。

第一班

長野市眞田宝物館 松代眞田家文書

山口県文書館 毛利家文書

ほかにカ所

第二班

上越市 福永家文書

京都市史編纂所 北観音山文書ほか

京都府立総合資料館 古久保家文書

鶴岡市郷土資料館 川上家文書・閑散文庫 ほか三カ所

第三班

鯖江市日の出町 窪田家文書

東大阪市史編纂室 山沢家文書

静岡県富士山町江川文庫 江川家文書

京都大学国史研究室 長坂氏記録

調査に際しては史料ご所蔵の関係各位から格別のご配慮とご協力をいただいた旨を記して深甚の謝意を表したい。

ほかに二カ所

ほかに二カ所

ほかに二カ所

ほかに二カ所

ほかに二カ所

ほかに二カ所

ほかに二カ所

ほかに二カ所

ほかに二カ所

ほかに二カ所

ほかに二カ所

ほかに二カ所

ほかに二カ所

ほかに二カ所

ほかに二カ所

6月27日から

閲覧業務を再開

前号で予告いたしましたように、新改築工事とそれに伴う史料の移転などのため、本年一月から閲覧業務を停止しており、利用者各位に大変ご迷惑をかけていますが、いよいよ来る六月二十七日（月）から再開できる見通しとなりました。

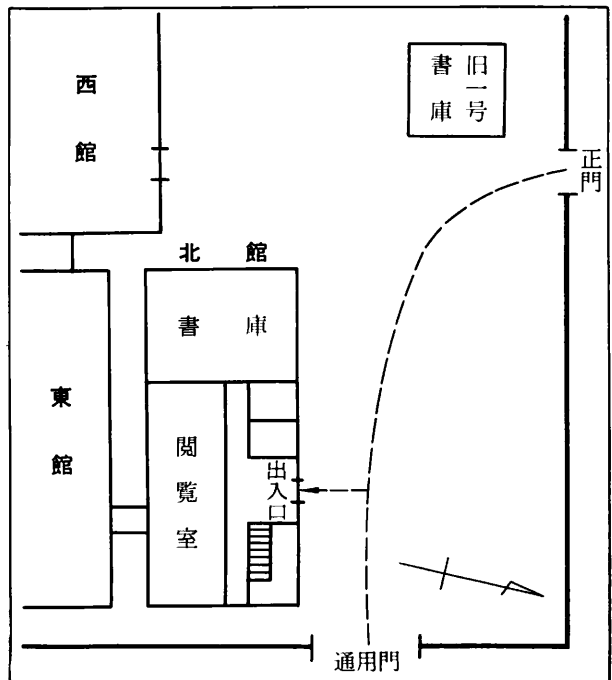
一月中旬には史料移転のレイアウトをはじめ各種の手配を終えて、下旬から移動を開始し、二月中には新書庫への移動だけは一応完了しました。何しろ五〇万点に近い史料であり、多少の事務用の書類や器材もあることで、それだけでも大事業でしたが、旧書架の移設再利用や旧書庫の取壊しなど、作業を併行して進める必要もあって、成りゆきが心配でしたが、ほぼ計画通りに終ることができました。そのあと、史料の入れ違いや配架ミスのチェックが、これまた一仕事で、史学科学生諸君の助力を得て、現在も続行中です。しかし、全史料について点検を実施することは時間的にも無理があるので、重点的にせざるを得ず、再開後のご

利用に、あるいはご不便をかけることが起るかもしれませんが、予めお許しを願っておきます。また、諸種の事情により書架の設置が一部未着工で見送られたため、昨年来の封鎖史料の一部が、閲覧不能のまま残っています、これまた暫くご猶予下さるようお願いいたします。それにしても、史料の移動には損失面が大きく、史料保存機関の書庫設計には十分な配慮が必要なことを改めて痛感しております。

ともかく、停止期間の短縮のため関係者一同が精々努力したつもりですし、停止から半年以内で再開できれば、他の事例と比較しても決して遅い方ではないと存じます。私共の微意をお汲み下さって、六月二十七日までもう暫くお待ち下さい。

なお、再開後の閲覧業務は下図のように北館の一階でいたします。点線で示した出入口から直接おはいり下さい。（国文学関係の閲覧は西館の入口を使用します）閲覧の条件としては、まだ不十分な点が多いので

新 閲覧室 案内 図



すが、今回は室も少しは広くなりましたし、机や椅子も一部は新調のものに変わり、従来よりは快適な条件で閲覧できるようになったと思います。もとより、閲覧利用の条件が暖冷房完備にあるわけでないことはいうまでもありません。出納・調査・参考などを含めて、当館としては、利用

者にできるだけご便宜がはかれるように、今後とも努力して行きたいと思ひます。利用者各位もよろしくご協力下さるようお願いいたします。

史料館報 第二六号

昭和五二年三月三日発行

編集・発行

東京都品川区豊町一ノ六二〇
国文学研究資料館内

国立史料館

印刷所 勝美印刷株式会社
東京都文京区小石川一三ノ七

電話 (七八三) 九一〇六(代)
電話 (八二二) 五二〇二(代)

電話番号変更のお知らせ

本年四月十一日から当館の電話が左記の通り変更になります。

代表 〇三(七八五)七一一一